KSK まちの仲間

第 8 号
発行日　1994年12月10日
編集人　横浜市グループホーム連絡会
横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家内
TEL 045(623)5318 FAX 045(623)5319
昭和51年12月22日第3種郵便物認可
KSK 増刊通巻1134（毎月4回5・15・20・25日発行）

連絡会がめざすもの

横浜市グループホーム連絡会
会長　室津　滋樹

グループホーム連絡会が活動を始めて、八年になります。当時はまだグループホームが二カ所しかなく、連絡会と名乗るのも気恥かしかったのですが、横浜市に要望したいことが山ほどあって、要望書を出すために連絡会の名を使いはじめたのです。

初期の連絡会は、グループホームの運営責任者たちが集り、悩みを語り合い、励まし合う、このことが一番大きな役割だったような気がします。夢いっぱいにグループホームはスタートしたものの、はじまるとどう対処したらいいのかわからないこと、失望したり、落胆するようなことが次々と起ります。そのような時悩みを出し合い、他のグループホームの経験をきき、グチも聞いてもらえる、そして、うまくいったときには自慢話も聞いてもらえる、グループホーム連絡会はそんな場所でした。

時間の無駄と思われるかも知れません。しかし、どんなに小さい組織でも責任者というのは愚痴や弱音をはける場は少ないので、一人で悩むことも多いのです。ですから、グループホームがここまでやってこれたのも、こんな連絡会があったからこそという気もします。

しかし、三年ほど前からグループホーム連絡会は大きな飛躍をしようと模索を始めました。めざすのは入居者が中心のグループホームということです。

もちろん、最初から、グループホームは入居者の家であり、彼らこそ中心だと考えてはきました。しかし、知的な障害をもつ人たちが、運営に参加したり、グループホーム連絡会で活動したりできないのではないかと思っていたのです。グループホームがこれからどうあるべきか、どういう制度が必要か、本人たちを抜きに話し合ってきたのです。でも、これは大きな間違いではないだろうか、そんな思いから、グループホーム連絡会は新しい試みを開始したのです。

まず、最初は、入居者向けのニュースの発行から始まりました。入居している人たちが読みやすいニュースをつくる、連絡会がやろうとしていることや、やったことを入居者がわかるように伝える、自己決定する上で必要な情報の提供がそれまでできていなかったのです。

そして、連絡会に入居者部会もできました。最初は話し合いにならず、部会の中心メンバーたちもどうしたらいいのか困っていたようです。そのうちに、会議の進行や話の中身を理解するのが難しい人には援助する人をつけたり、全員一斉に決をとるのではなく、一人一人に賛否をきくなどの工夫をしながら、話し合って決めることができるようになりました。三年を経た今では、連絡会の中で最も活発な活動をする部会です。「自分の暮らしは自分で決める」そのようなグループホームをめざして、これからも模索を続けたいと考えています。

グループホームの安定と地域福祉の充実を

――横浜市に要望書を提出――

八月二九日、グループホーム連絡会では平成七年度予算作成にあたっての要望書を横浜市に提出しました。

一九八四年に横浜のA型グループホーム、ふれあい生活の家とダンボがスタートしてから十年の歳月が流れました。当時はまだ若かった入居者も三十代、四十代になりました。入居者の変化もさることながら、この十年間、グループホームをはじめとする制度の足りないところを補ってきた実家のお母さんやお父さんの介助する力、援助する力の低下は著しいものがあります。親が亡くなった人もいます。

時には実家に帰りたくとも帰るところがなくなった人、何日も続けて実家で過ごすことはできなくなった人が増えました。障害の重い人の生活を三六五日いつでも支えていける本来の「家」にするためには、職員体制の充実などグループホーム制度の強化をはかる必要性に迫られていることを横浜市に話してきました。

それと同時に多くの介助を必要とする人にとっては、親に会いにいくにも介助者が必要になっています。グループホームのなかだけのサービスの充実では対応できません。障害者がいつどこにいても対応できる地域サービスが必要になっています。

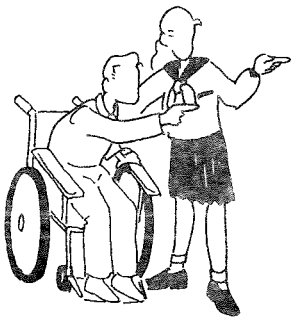
たとえば実家に帰った時には実家に来ておふろに入れてくれる介助者が必要になってきます。神奈川県はホームヘルプ制度を充実強化するものとして、障害者自身が介助者を選んで登録できる介助者派遣事業を今年度より新設しています。横浜市においてもこの制度をより発展させたものとして、例えば自宅に限るなどといった場所の限定をなくし、障害者についてまわる介助サービスとしての性格をもった介助者派遣制度をつくってほしいと要望してきました。

また知的障害者も含めて、ひとりで外出ができない障害者のためのガイドヘルパー、ガイドボランティアの派遣を実施することと、その派遣内容の枠をなくし、余暇活動にも利用できるようにすることを要望しました。

またグループホームの入居者は障害の重い軽いにかかわらず、多様なニーズをもっています。グループホームから離れて暮らしたいと望んでいながら不安が強くて踏みきれない人、人間関係をうまくやっていく力が弱く、少し離れたところで暮らして援助を受けた方がうまくいく人、結婚しても非常に多くの手厚い援助を必要とする人など、グループホームのブランチを求めている人はたくさんいます。グループホームを建物の形態から捕らえるのではなく、介助のシステムから考え、多様なグループホームを認めてほしいとの要望をしました。

「親が年老いても障害者は今まで通り地域に住み、時折親に会いに行くことができる暮らし」この普通の営みができるようになることが今、問われはじめているのではないでしょうか。

この十年間、横浜市と話しあってきたことがさらに充実した形となって実現していくことを期待しています。



ゆめはまプランが確定 連絡会の要望が実現

横浜市は十二月にゆめはま二〇一〇プラン基本計画と五カ年計画を確定、発表しました。ゆめはまプランは、二〇一〇年までの横浜市の長期計画で、九三年に長期ビジョンが確定、昨年六月に長期計画の案が発表になり、市民からの意見や、国際港都建設審議会の審議を経て案を修正、十二月に確定しました。

私たちグループホーム連絡会は基本計画案の策定過程に障害者が参加していないこと、内容的にも障害者やその家族が参加し、自ら運営する活動ホームは今後新設せず、法人運営のデイサービスセンターは四八カ所建設するなど、「完全参加と平等」という視点からは大きく後退したといわざるを得ないと訴えてきました。そして、作業所連絡会、活動ホーム連絡会、障害児を守る連絡協議会の四団体で横浜市と国際港都建設審議会に要望書を提出し、障害当事者の参加を訴え続けました。

審議会、横浜市ともに私たちの主張を真摯に受け止め、今後も活動ホームを建設するなど多くの修正がなされました。

基本計画案が作成される過程での参加の問題を指摘してきましたが、その後、多くの障害者団体や私たち連絡会との話し合いなどを通して案を修正し基本計画をつくったことを私たちは高く評価しています。

二〇一〇年の横浜の障害者福祉はどうあるべきか、このことを考える時、まず先に聞くべきはそのサービスを利用する障害当事者の意見であるべきだと私たちは考えます。「ゆめはまプラン」が障害当事者の参加の下に具体化されるよう期待するとともにそのためにグループホーム連絡会は活動を続けるつもりです。

障害者の明日を考える集い開催される

去る十二月八日、大通り公園において横浜市障害者地域作業所連絡会、障害者地域活動ホーム連絡会、横浜市グループホーム連絡会の共催で「障害者の明日を考える集い」がおこなわれました。

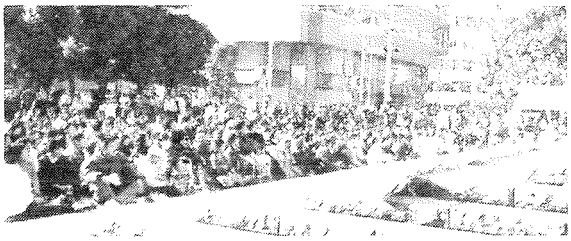
この集いは十二月九日の障害者の日を前に、「障害者が地域でともに生きること」を広く市民に訴えるために企画されたものですが、当日はよい天気に恵まれ千三百名の人たちが集りました。

開会とともに、みんなから募集したこの集いに寄せる想いが四本のアドバルーンに乗ってスルスルとあがっていきました。

青空にくっきり浮んだ「障害者の完全参加の実現を」「だれもが生きられる社会を求めて」「ひとりひとりがありのままに」「障害者とともに歩むまち、よこはま」の四つのアドバルーンは、きっと多くの人の目にとまったことでしょう。

つぎに、参加者を代表して駒岡作業所の吉田さんがアピール文を読み上げ、さらに作業所、グループホーム、活動ホームから現状報告がおこなわれました。

そのあと横浜市や市議会各派に提出する要望書の説明を間にはさみながら、シャボン玉ショー、バンド演奏、全員参加のすずわりなどがおこなわれ、午後三時半、障害者が安心して生きていけるまちづくりを願いつつ、楽しい集いの幕を閉じました。



あたらしいグループホームですよ・ろ・しく

グループホーム グリーンツリー

グリーン ハイツ♡

都築区の見花山という所にあり、5人のメンバーと2人の援助者で生活しています。昼間は第1・第2かたるべ社（作業所）とワーナーランバートという会社で仕事をしていて、グリーンハイツに帰宅する時間はそれぞれバラバラで、帰ってくると夕食の準備をします。夕食の時はテレビを見ながらその日の事を話し、夕食後は各自テレビを見たりゲームをやったり、本を読んだりしています。

見花山という土地は行事がさかんに行なわれている所で、バーベキュー大会や夏祭りや運動会に参加しました。

グリーンツリーは保土ケ谷区上菅田の横浜では比較的緑の多い場所にあります。中途障碍の人を中心に各種障碍のある人達5人と職員1人が生活しています。8月には東京ドライブ、10月には富士山・牧場に行き、手さぐりながらも6人が一緒に独自の他にはないホームにしようとがんばっています。

ホーム内での生活はというと、できることを自分で見つけ自主的に何でもやってくれます。職員がだれだかわからなくなるようなこともしばしばです。とにかく自然の形を大切にしながらグリーンツリーはがんばります。

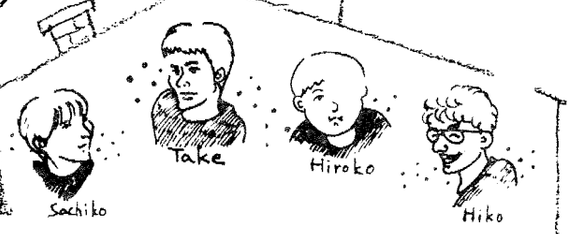
グループホーム ハイツ ナルミ

私たちのグループホームは5人で生活しています。みんな元気です。カラオケに行ったりしています。ゆうがたまでねむっている人もいます。おさけをのんでいる人もいます。ワインをのんでいる人もいます。私はでんしゃにのりに行ったりしています。バスもだいすきです。かれしもいます。しょくいんです。鈴木ともひろさんとけっこんをします。天王町えきのちかくなのでとてもうるさいです。いつもへやからでんしゃを見ることができてうれしいです。

入居者 千葉 綾子

ホームの玄関から駅の改札まで車椅子で1分の近さ。なのに一戸建ての新築豪邸を借りることができました。環境はにぎやかですが入居者のみなさん物静かな落ちついた方ばかりです。

グループホーム きゃんばす



深沢 裕子
趣味…歌を聞くこと
好きな色…みどり
好きな物…お酒
好きなこと…カラオケ
自分では真面目だと思っています。
わたしは、やせたーい！

鈴木 幸子
私は、松山千春が大好きです。（歌の中では、恋がとくに好きです。）あと、詩を書くのが好きなロマンチストな私です。将来はグループホームを出て一人暮らしがしたいです。

雨宮 建
歌を聞くこと、野球、相撲などを観戦するのが大好きな彼。それからNHKのニュースが好きと勉強家な一面ももっている彼です。

岡村 宏彦
オリンピック、野球、サッカーなどのスポーツの観戦が大好きな岡村くん。旅行も大好きで、旅行の計画が得意な彼です。

はじめまして ハウスBEE です

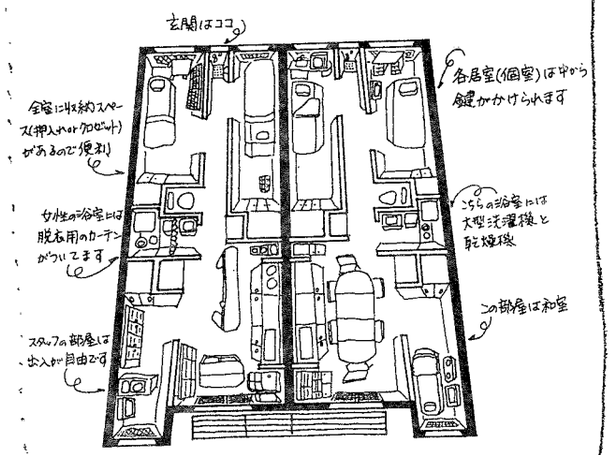
4月にオープンしたB型グループホームです。だから、BEE（びー）なんです!!

「横浜やまびこの里が運営する重度自閉症者のグループホーム」そういう枠とはまた別に、BEEは〈ハウスBEE〉としてちゃんとあります。めし喰って、テレビ見て、風呂はいって、ガーガー寝る。みんな結構仲悪くて。入居者もスタッフも。でも、みんな結構気にいって生活しています。

職員 中山

GROUP HOME ルーミー

マンションの205号室と206号室を借りています。3DKタイプの2つのユニットには、浴室とトイレもそれぞれついていて、ベランダで行き来ができます。205号室には女性2人とスタッフの個室、それにキッチン兼リビング、206号室には男性3人の個室と食堂があります。



シリーズ まちの中で
―まちの人たちとのページ

グループホーム今人から30mの所に八百屋さんと食料品店があります。職員やメンバー、ある時は食事のボランティアの人が買い物によく行きます。

食料品店の御主人

――今人について――

「うーんみんないい人。にぎやかでいい。」

「暗さがないね。」

「困ることはないよ。せいぜい寄ってください。」

「お客さんとしても問題ないよ。」

「みんな仲がよく、家庭的だね。」

グループホーム 今人

「八百屋のおにいさん親切な人。」

「床屋の人とはよく話をする。」

「食料品店の人はまけてくれる。」

「そうネ、親切ね。」

「自動販売機はよく行くけれど……。」

街の中でくらして3年。やっと回りの風景が見えてきたのかなと思うこの頃です。

グループホーム くじらの皆さん

荒田 富枝

「おはようございます。」元気に声をかけて入ると森山さんのやさしい笑顔と、「おはようございます。」の声が返って来ます。礼子さんはと見るときれいに整頓されたお部屋にお行儀よく座ってにっこりと微笑んでくれます。

くじらホームの日曜日のお昼作りに伺い出して二年、自分自身の子育ても一段落して、何か少しでも私の出来る事でお役にたてるような事がしたいと思っていた矢先、民生委員の阿部さんからのお話でホームの皆さんと知り合う事が出来ました。

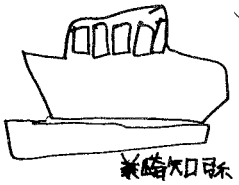
公私共に多忙で張り切っている輝さん、敬謙なクリスチャンで英語や手話に前向きに取り組み頑張りやの慎吾さん、お休みの日はほとんど実家に帰られてお逢いする事はあまりないのですが、旅行が趣味の新見君。皆さんそれぞれ忙しくて五人揃う事はめったにありませんが、作ったものはみんな美味しいと言って食べてくれるやさしい方々です。

皆さんそれぞれ仲間を思いやり、喜びも悲しみも分け合ってお暮しの様子は素晴しく、人を思いやる気持が希薄になりつつある昨今、とってもよいお仲間だなとつくづく思っている今日この頃です。

未熟な私ですがそんな皆さまの仲間に入れて戴けるよう頑張って行こうと思っておりますので、よろしくお願い致します。

―＊　＊　＊―

（荒田さんは毎週日曜日の昼食をつくりに来てくださる人です。近所に住んでいて何かあれば助けてくださいます。）



グループホーム交流会

参加者102名!!

去る11月26・27日グループホーム連絡会の交流会が行われました。

今回は100人を超える参加者があり、横浜あゆみ荘では定員オーバーということで、シーサイドライン「野島公園」にある『野島青少年研修センター』での一泊二日でした。このセンターはベットメイキングから食事の用意まで自分たちで……とのこと。「では少し変ったことを……」と今回は「調理をやってみよう」と、センターの中の広い調理室で希望した人たちが翌朝のサラダ等を作成。またレクでは、去年くらいから人気が出はじめたペタンクや、ゴロベース、卓球、バトミントンにウォークラリーと、皆さんそれぞれに11月最後の少し遅い「スポーツの秋」を楽しみました。また夜は昨年同様、ゲーム、カラオケ、ディスコ、交流会。そして翌日はセンターの前で希望者だけでバーベキューをしました。今回は新しい試みとして調理とバーベキュー、参加された皆さんいかがでしたか？ 私は改めてグループホームのメンバーの多さにビックリしました。

（西岡）

立ち話し

施設からグループホームへ

K　今度息子さんグループホームに入ったんだって？

F　そうなの。施設にしばらく入所していたんだけど……

K　施設で具合悪いことでも？

F　そうじゃないの。それなりに暮していたようよ。ただ園のきまりではなかったけど毎週土・日には帰宅させていたの。それが遠くて送り迎えがだんだんしんどくなって、近くの方がいいと……

K　親も年とるからね。

F　それと施設の中だけの生活ではなく、もっと広い地域でいろんな経験をさせたかったの。そんなときグループホームでどうかっていう話をきいて。障害が重いから不安だったけど何度か体験入居してみたの。それでホームでの様子などをきいて、もう思い切って入居させてみたわけ。

K　彼はグループホームでどう？

F　言葉がないでしょ。だから表情や反応を見るしかないの。はじめはいろいろな面で大変だったけど最近は少し落着いてきたみたい。慣れるまでにはまだまだ時間がかかると思うわ。でもグループホームの方が規模が小さいから細いところまで目が届くんじゃないかしら。それに息子は賑やかな所が苦手だからグループホームの方が落着けると思う。

K　せっかく施設に入れてもらえたのに。施設の方が安心だっていう親は多いでしょ？

F　そうなの。よく言われるわ。でも「安心」って誰の安心？子どもの人生はこれから先長いのよ。親の安心のためだけで決めるわけにはいかないわ。あっちにぶつかりこっちにぶつかり迷惑がられたりするかもしれないけれど、いろんな所へ出て行けば彼を理解してくれる人も増えると思う。彼が大きな声を出すのはちゃんと理由があるんだってわかってくれる人ね。

協力会員募集！

まちの中でくらしている障害者の姿や声をお届けする機関紙「まちの中で」を発行しつづけるためにご支援をお願いいたします。

会費（年）1口 2000円

振替…00280-7-73608
横浜市グループホーム連絡会

☆協力会員になっていただいた方には機関紙をお送りいたします。

基金づくりにご協力を！

グループホーム運営支援基金のためにみなさまのお手元でねむっている未使用のテレフォンカード，オレンジカード，ビール券，商品券などのご寄付をお願いします。

送り先・横浜市グループホーム連絡会
事務局
〒231 横浜市中区本牧満坂10
本牧生活の家 045-623-5318

ありがとうございました（'94・7・1～12・17）敬称略

寄付　グループホーム グリーンハイツ　室津滋樹　市原かね子　玉井きみえ　上野敬子

テレフォンカード　伊藤弘子　松木商店　郡幸子　高原はるみ　安田綾子　桑原玲子　森内妙子　小川千代　藤尾孝枝　牧篤子　岩屋文夫　大津京子　中区本牧活動ホーム　市原かね子　雫洋子　二神徳子　宮島真希子　中嶋　石田祐子　川上照子　大川和子　永野昭子

協力会員　菊地貞子　武田美歌　児玉英隆　高瀬和子　田中由紀子　鈴木恭子　坂村光永　地域作業所 虹A・B　大川武　鈴木豊　鈴木康之　駒村隆弥　稲庭千弥子　目黒久美子　嘉山初枝　中尾松枝　坂田信子　玉井慶一　佐藤由身子　小沢洋子　椎木章　橋詰牧子　地域作業所 ブルースカイ　谷口政隆　ポパイ　桑の木園　本田祐子　鈴木伸　青井富三子　飛田利美子

編集後記　たくさんの方から御支援いただきまして有難うございました。感想などもお寄せ下さい。郵便かFAXでお願いします。

発行人　神奈川県身体障害者団体定期刊行物協会
横浜市港北区鳥山町1752
横浜ラポール3F
編集人　横浜市グループホーム連絡会
横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家
TEL 045(623)5318
FAX 045(623)5319
郵便振込番号 00280-7-73608
名称　横浜市グループホーム連絡会
編集責任者　室津　滋樹
定　価　100円

（増1） まちの中で NO.8 1976.12.22第3種郵便物認可KSK通巻1134号（毎月4回5・15・20・25日） 1994.12.10発行

阪神大震災にあった障害者が地域で暮らし続けるための支援を

横浜市グループホーム連絡会
会長　室津　滋樹

１月１７日未明におきた阪神大震災は私たちの想像をはるかにこえた災害となりました。このたびの地震によって亡くなられた方々に慎んで哀悼の意を表しますとともに、災害にあわれました皆様にお見舞い申し上げます。

この苦境の中、地域で暮らしておられる障害者の皆さんのたくましく生きておられる様子もたくさん伝わってきております。しかし、まだ多くの在宅障害者の方々が救援を得るすべもなく、精神的に不安定な状態に置かれているのではないかと心配です。

また倒壊した作業所もたくさんあるようですが、無事であった作業所や通所施設の中には地域の障害者の方々の支援の場となり、大きな役割を果たしているところもあるようです。また大阪には障害者救援対策本部が設置され、まもなく被害の大きかった神戸でも本格的な救援活動が開始されようとしております。

このような事態の中で私たちはどのようなことをすべきなのか、何に限りある力を注げばいいのでしょうか。

今回の地震による被害は例えようもなく大きく、建て直しには長い時間と膨大なお金と人手が必要になります。一方、このような不安な時にこそ作業所のような昼間の活動拠点が一日も早く動き始め、生活安定の場としてグループホームが増設されることが望まれます。そのためには作業所やグループホーム等、国の制度に基づかない取り組みについても再建のために国が手をさしのべることをみんなで要求していかなければならないと思います。また被災地の障害者の皆さんが生活を続けていくためには、介助者等多くの人手を必要としています。被災地の障害者の皆さんが地域の中で暮らし続けるためにグループホーム連絡会ではボランティアの派遣をおこないたいと思っています。

また被災された障害者の方々が一時的な休息の場、あるいは新しい生活を設計されるまでの期間滞在される場を必要とされることもあると思います。そのような時に全国各地の地域で障害者の皆さんを受け入れることが実現することを願って、被災地の障害者の方々が必要とされる時には可能な限り横浜のグループホー

ムでも受け入れたいと考えています。

このような時こそ障害者が地域で生きることの真の意味が全国的に問われています。これらの支援を長期にわたって行うためには非常に多くの方々の協力を必要とします。地域で生活している障害者の存在がこの混乱の中で忘れられることのないように皆で力を出しあい、行動しましょう。力を貸してくださる方、資金を援助してくださる方、私たちの取り組みに賛同してくださる多くの方々、自分にできる方法でお力を貸してください。

これらの取り組みは、私たち横浜の障害者が災害にあった時の備えを見直すことにもつながります。地域との関係、多くの人とのつながりについて考えることも大切です。横浜のまちについても考える必要があります。例えば本牧生活の家の広域避難場所は道一つ隔てた山の上の公園です。しかし、本牧生活の家からこの公園に行く近くの道はすべて階段です。階段を使わないで山の上に逃れようとすると１キロも遠まわりをすることになります。しかし阪神大震災のような災害時に１キロの道は遠いです。こわれた塀や家屋で道をふさがれたり、火災が発生したりで行き着ける確率も低くなります。目の前にある避難場所に行ける方策を考えてほしいと横浜市に要望しています。「まちの中で」をお読みになっている方々にもお願いします。皆さんの地域の避難場所を点検してください。今回の大震災でも多くの障害者や高齢者が亡くなりました。横浜市も地震多発地域にある大都市です。横浜市も私たちも今回の経験をまちづくりに生かすべきであると思います。

資金を援助して下さる方は次の方法でお送り下さい。

郵便振込：横浜市グループホーム連絡会

００２８０－７－７３６０８

（必ず通信欄に「阪神大震災カンパ」と明記のこと）

障害者の介助等、生活支援のためのボランティアをご希望の方は名前、連絡先、可能な期間等を登録して下さい。

連絡先：横浜市グループホーム連絡会

TEL　045-623-5318　　FAX　045-623-5319

（増3） まちの中で NO.8 1976.12.22第3種郵便物認可KSK通巻1134号（毎月4回5・15・20・25日） 1994.12.10発行

被災地西宮レポート

グループホーム・下宿屋　　甲方　裕之

１月１７日未明の兵庫県南部地震の被災地である神戸、西宮には古くからの知り合いが何人かいる。親元を離れ、生活保護を取って介護者を交替で呼びながら、ひとり暮らしや夫婦生活をしている身体障害をもった人達だ。

１９日夕方、そのひとり三矢英子さんが、つぶれた文化住宅の一階から遺体で発見されたという知らせがあった。２１日午後、運営委員長の横田さんから「神奈川として何ができるか。とりあえず甲方君、現地へ行って三矢さんの事や向こうの障害者の様子を詳しく聞いてきてくれないか」という電話があり、運よく下宿屋が非番だったので、とにかくざっと援助物資を買って、そのまま新幹線に乗った。

西宮で自立生活をしている女性障害者、淡路さんのところにみんな集まっているという。淡路さんの住んでいる平屋の市営住宅は、阪急西宮北口駅から歩いて１５分ぐらいのところ、平木中学校の川向かいにある。幸い停電はしていないようだ。夜の８時半を過ぎているのに、駅前はリュックを担いだ人、水を入れるポリタンクを持っている人などで大勢ごった返し、自転車と原付バイクがどこまでも並んでいた。

淡路さんの家での話は後に回すとして、まず三矢さんの事から――

解放センター（作業所）職員のＫ君の車で三矢さんの家へ向かう。車が裏道に入ると住宅の壊れ方はずっとひどくなった。完全に崩れ落ちている家がかなりある。ブロック塀がそのまま倒れていたり、家の一部が崩れて道をあちこちで塞いでいて車が通れず、何度か後戻りをしてやっと三矢さんのアパートの近くまできた。車を降りて歩く。

「ここ…」指差されたところは地上１メートルぐらいの高さに二階の床があり、その下は何がどうなっていたのか全く原形をとどめていない。

☆福永さんの話から　＜三矢さんのこと＞

福永さんは一人でベットで寝ていたが、地震ですぐに停電となり、部屋の周りの熱帯魚の水槽がすべて割れ、床は割れたガラスと水浸しになった。幸いベットの上はたいしたこともなく、何とかベットの脇の電動車椅子に乗り、「助けてくれ！」と叫んでいたところ、２０分ぐらいして近くに住んでいる介護者が助けに来た。介護者と二人で情報が一番集まる所、電話がかけやすい所というので警察

に行き、仲間の所在を確認しつつ警察で一夜を明かした。　朝になって、平木中学に避難していた淡路さんらと会って情報交換。三矢さんだけが行方不明ということで、アパートに来て掘り出そうとするがどうにもならない。市役所に行き、救助を訴えるがいつになることか分からず、阪大の学生に連絡。学生約１０人を使ってベットの上まで掘ったものの三矢さんは見つからず、市職員らにこれ以上掘るのは危険だと止められる。

翌１９日、朝１０時から高知県警の人達が来て、午後１時にやっと三矢さんが遺体で出てきた。その後、三矢さんは駐車場に布団を敷いて寝かされたまま。また市役所に行って要請し、夕方ようやく中央体育館に運ばれた。

体育館の遺体置き場には、棺桶もなくそのまま通夜となる。

死亡者が多いため火葬は２８日頃ということだったが、あちこち連絡を取り、京都府高槻市にある教会の関係でできるという情報が入り、２０日の夜１０時に福永さんと健全者で車で西宮を発つ。現場でさらに２時間ほど待ってようやく火葬となった。遺骨と灰を、福永さんと娘の史歩さんの避難所である総合教育センターに持ち帰る。

三矢さんは以前から「死んだら灰を海にまいてくれ」と言っていたので、この灰は史歩さんと福永さんとで沖縄の海にまいてやろう、沖縄に行きたいって言ってたから。と話していた。

☆避難と避難所での様子

神戸の沢田さん。神戸でも沢田さんの住む辺りは被害が大きく、西宮からも離れていて連絡も取れない上に、障害が重度化していて慣れた介護者でないと意思の疎通が難しいなど、安否が気遣われていた。

沢田さんも夜は一人だったが、住んでいた賃貸マンションは壊れず家具が倒れたりしただけで、ベットの上の沢田さんは無傷だった。一人で動けないでいた沢田さんを助けに来たのは近所の電気屋さんで、そのまま電気屋さんが３日間介護を続け、混乱の中、気力も限界かという頃に連絡を受けた介護者が大阪から迎えに来て、大阪の中部障害者解放センターに避難していった。近いうちに、西宮から沢田さんに会いに行くということだった。

この西宮では、地域で生活している障害者が比較的近いところに住んでいたというのもあるが、とりあえず無事であった健全者が自転車で障害者のところを回り、車椅子で避難所まで送り、また他の障害者の所へ行って避難所まで送るということを互いに連絡を取りながら繰り返して、三矢さん以外のメンバーの所在をつかみ、何人かで固まることで不自由な避難所での生活を精神的にも支えていっ

たという。

避難所（平木中学校体育館）での生活はさすがに厳しく、２日目、３日目となると緊張と疲れから、ストレスがたまり、さらに三矢さんの遺体発見と続き、精神的にかなり参っている状態で、ほかの被災者との間にいざこざが起こることもあったという。４日目になって川向かいの淡路さんのところに電気が回復したのを機に、淡路さん宅に移ることになる。

５日目に僕が訪ねていった時は、ちょうど晩御飯を食べ終わったところで、障害者４人と健全者６人がやぐらごたつに入ってテレビを見たり、後片付けをしたりしていた。地震直後の様子を聞くと、「上から物が落ちてきたり、タンスが倒れたりして怖かった。でも家がまだ残っているし、逃げてこられたから良かった。」「すごかった。寝たままで全然動けんかった。よう生きとった。Ｆ君が助けに来てくれた。親父も弟も死んだ。」……

「ここももう一回大きい地震（余震）がきたらどうなるかわからんけど、それほど被害もなかったしね、きのうから電気もついたし、みんな疲れ切ってるからここの方が……。今のところみんな落ち着いてる。」

福永さんらは総合教育センターを避難所としていた。ここは廃校になった小学校の跡をそのまま使っているところで、多くの人が避難している体育館とは別棟の元校舎の一階、会議室となっているところに障害者３人と健全者５人がいた。他の被災者から離れた部屋で、ほとんど男ばかりというのが良いのか、関西風味の冗談が飛び交い、なかなか元気で、ここならではの共同生活といった感じがあり、一杯飲みながら今までの話を聞かせてもらった。　ここは地震後も停電にならず、その部屋はエアコン、テレビ、冷蔵庫付きで、なにより玄関脇に使える公衆電話があった。また隣が職員室で外からの電話を取り次いでくれたりもした。僕が行ったときには、食料も水もかなりの量あったが、福永さんらが来たときには何もなく、しかも二階の部屋を使うように言われ、この時も福永さんは市役所へ行って、三矢さんの時と同様、あの大きな目が飛び出すような勢いで抗議して食料と部屋を約束させたのだという。片方で三矢さんの捜索も指揮し、仲間たちがどうしてもっと早く掘り出そうとしなかったのかと、やりきれない思いをぶつけていた。

☆被災地で感じたこと

淡路さんの家で、安堵感の漂うみんなの顔を見て、自分の家で当たり前にいつもの生活ができることの大切さを改めて思った。ガス・水道はまだだが、電気があると大抵のことはできるものだと妙に感心してしまった。冷蔵庫、電子レンジ、

電気ポット、炊飯器、エアコン、テレビ、ＦＡＸ……。

特に今回ＦＡＸは、姫路の障害者、大賀さんが地震後いち早く各被災地での障害者関係の情報を集め、それを被災地とその周辺の障害者団体にＦＡＸで逐次流し続けてくれたことで、救援活動がスムーズに行われ、被災した障害者の大きな力となった。実際に僕も淡路さんの所に送られたＦＡＸを手にして本当に感動した。この大災害の中で、これだけの情報量（１回の通信がＡ４版で３～４枚）を交換できる、このネットワークの何と素晴らしいことか。被災後５日目の夜に、もう第１１信が届いているのだった。

教育センターで一夜を共にして思ったのは、やはりトイレや健康上の問題、そして今後の生活の問題である。仮設トイレには大便があふれ、あちこちで使用禁止になっている。水洗トイレに流すバケツの水も貴重品である。実際、トイレに行くのは勇気がいる。緊張からくる便秘、風邪も引きそうだ。配給される食料は確かに余っているが（カップ麺なんかは山積みにされている）、インスタントかそのまま食べられるものばかりで、バランスの良いものといえば果物と牛乳ぐらいだ。洗濯も避難所では難しい。お風呂は車か電車で銭湯まで行くか、知人宅を頼って行くしかない。これから何カ月もの間……。　着のみ着のままで崩れかけた家から飛出し、倒壊の危険性から家に戻ることもできず、いつまでも避難所暮らしを強いられている仲間はかなり多い。かろうじて残った家も家具や食器が床に飛ばされ、後片付けをするだけでも、大勢の介護者と多くの時間が必要となってくる。介護者は大丈夫だろうか。　ここでは避難所暮らしの中で、それぞれができるだけその障害者に合った形での支援を要求し、また提供していた。喘息発作を持っている人や精神的に不安定になりやすい人もいる。薬の確保や応急処置など、日常的な付き合いこそが大きな力となっている。いつも解放センター内外で一緒に活動している者同志の強い仲間意識とエネルギーを、この西宮で強烈に感じた。

三矢さんは亡くなってしまったけれど、福永さん、みんな、生きていて本当に良かった。何よりも、落ち着いた暮らしを一日も早く取り戻してほしい。

横浜でできることは何か。改めて考えていくことは何か。話し合ってみたいと思う。